

はじめに

本書『瀬戸内の中世2 生産・流通・港津』では、中世の瀬戸内地域における生産と流通に関する問題を取り上げる。シリーズのもう一冊『瀬戸内の中世1 権力・城館・寺社』が、おもに領主・宗教勢力による地域支配に関わる事象を取り上げるのに対して、本書では社会経済史の視点から、地域に暮らす人々の生活を支えた生産と流通が地域社会をどのように形づくっていたのかに焦点をあてる。

あらためて指摘するまでもなく、中世瀬戸内地域をめぐる社会経済史研究は、文献史学と考古学、さらには歴史地理学や民俗学など多くの分野が連携した学際研究が活発に取り組まれており、多くの成果を上げてきた。文献史学による荘園史、交通・流通史研究を基盤に、一九七〇年代以降は瀬戸内海沿岸各地で生産・消費遺跡の発掘調査が進展し、一九九〇年代以降には文献史学と考古学の研究成果を総合化する研究が進められてきた。二〇〇〇年代以降になると、『中世西日本の流通と交通』（橋本久和・市村高男編、高志書院、二〇〇四年）、『中世瀬戸内海の流通と交流』（柴垣勇夫編、塙書房、二〇〇五年）、『考古学と室町・戦国期の流通』（日本中世土器研究会編、高志書院、二〇一一年）などの優れた成果が刊行されている。本書もこうした成果を継承しつつ、近年の調査・研究の動向などもまじえながら、当該領域の研究のさらなる進展をめざすものである。

まず「第1部 流通体系の交錯」では、瀬戸内海沿岸各地に立地する流通・交易の拠点となる港津に注目し、それらの流通・交易機能が地域社会の形成にどのような役割を果たしていたかを明らかにする。綿貫友子「瀬戸内海東部の流通をめぐる」は、『兵庫北関入船納帳』の再検討をとおして周辺の諸港湾との関係を描き出し、摂津国兵庫津を核とする瀬戸内海東部の経済圏が、より広範な経済圏へといかに連鎖していくかを復元する。本多博之「中近世移行期の厳島門前町と町衆」は、安芸国厳島神社の門前町が瀬戸内海流通の拠点として果たした役割を示すとともに、その担い手であった町衆の活動に大名権力や海賊衆がどのように関与したかを論じる。前田徹「中世播磨の港津と物流―英賀と書写坂本―」は、播磨国姫路を核とする水陸交通の展開を復元するなかから、地域経済圏の具体的な姿を描き出している。大上幹広「瀬戸内海の高賊衆と室町・戦国期の流通」は、芸予諸島を拠点に活動した海賊衆の流通への関与と、権力との関係を概観する。

つづく「第2部 港湾と流通」では、備後国の尾道・草戸、伊予国の今治という港湾を取り上げ、それぞれの港湾をとりまく流通のあり方を探る。西井亨「中世尾道における瓦の流通」は、瀬戸内海を代表する港湾である尾道および周辺地域の中世寺院で使用された瓦の型式分類に基づき、瓦の広範囲におよぶ需給の実態を明らかにし、工人や製品が移動する実態を示す。鈴木康之「草戸千軒町遺跡と土器・陶磁器の流通」は、芦田川河口の港湾集落遺跡として知られる草戸千軒町遺跡における土器・陶磁器の出土比率を分析し、この集落にもたらされた消費財の変遷と、そこから復元できる瀬戸内地域における流通体制の変化を論じる。藤本誉博「中世の今治」は、伊予府中の地域構造を空間的に分析し、今治という港湾に多様な地域勢力が競合しつつ関与する姿を描き出している。

最後の「第3部 鉄と焼き物」では、瀬戸内海を行き交った物資のなかから鉄と焼き物を取り上げ、その生産と流通の検討をとおして瀬戸内地域の特質を描き出す。安間拓巳「中国地方における鉄の生産と流通」は、近年その研究が大きく進展した中国山地における中世の鉄生産の発展過程を概観するとともに、工人集団と領主権力との関係、さ

らには生産された鉄素材の流通に関する問題を論じる。亀澤一平「鉄製品の流通と鍛冶遺構―河後森城跡出土鉄製品を中心に―」は、河後森城跡(愛媛県松野町)から出土した鍛冶関係遺物を含む鉄製品の分析結果を紹介し、作事のための鉄素材として砲弾が城内に持ち込まれたこと、その流通の背景に豊後・大友氏との関係があった可能性を論じる。石井啓「備前焼の生産と流通」は、中世後期を中心に広く列島に流通した備前焼の窯跡の分布や窯構造の変遷をたどり、中世社会に備前焼が果たした役割を考察する。首藤久士「瀬戸内地域における瓦質土器の生産と流通」は、瀬戸内海沿岸各地に分布する瓦質土器の系譜を窯跡の構造や製品の分布から考察し、その地域的特質を描き出す。

さて、中世瀬戸内海の流通をめぐっては、畿内を中心とする求心的な流通構造が佐々木銀弥氏、脇田晴子氏らによって提示される一方(佐々木銀弥『中世商品流通史の研究』法政大学出版社、一九七二年、脇田晴子『日本中世商業発達史の研究』校倉書房、一九六九年)、鈴木敦子氏によって地域拠点を核とする经济圈が成立していることが論じられた(鈴木敦子『日本中世社会の流通構造』校倉書房、二〇〇〇年)。さらに、その後の中世考古学研究の進展は、窯業製品に代表される広域流通の実態を提示し、求心しない物資の流通網が列島全域を覆っていたことを明らかにした。現在では、求心的経済構造と地域经济圈とは相互に連鎖・補完しながら列島の経済を構成していたとする理解が一般的であろう。現状での課題としては、個別の地域经济圈の具体的なあり方や、そうした地域经济圈が相互にどのように関連しながら広域流通圏へと連鎖し、列島の流通圏を構成したのかを明らかにするとともに、そこに求心的な流通を位置づけること、さらにはその時期的変遷、あるいは流通に関与した人々の活動の実態や権力との関係などの諸点を挙げる事ができる。

文献史学と考古学などの協働は多様な成果をもたらしたが、それらの成果が必ずしも焦点の合った流通のイメージを描き出しているわけではない。たとえば、文献史学の立場から流通を論じる場合、残存する史料の密度から、時代

的には中世後期に軸足を置く議論が中心になりがちである。一方の考古学においても、中世前期には広域に流通する製品のダイナミックな動きを追うことが可能であるが、中世後期には地域ブロックごとの多様な製品の存在は確認できるものの、産地が同定できない製品も多く、具体的な流通構造の復原に向けては課題も多い。

これらの課題を克服するためには、まずは時代ごと、地域ごとの物資の生産・流通の実態を丹念に復元する作業の蓄積が不可欠かと思われる。本書においても、兵庫津・厳島・姫路・尾道・草戸・今治といった地域の拠点を取り上げ、それらの拠点が周辺地域とどのような関係を取り結んでいたかを検討している。さらには、地域経済圏の領域を越えて広がるネットワークとの関係を探求することができれば、列島全域に連鎖していく流通網を復元するための手がかりを得ることができよう。

さらには『瀬戸内の中世Ⅰ』とも関連するテーマであるが、権力による流通への関与のあり方も重要な課題である。とくに瀬戸内海においては陸上の領土の原理のみならず、海賊に代表される海の領土の原理が存在していたことが本書でも論じられており、瀬戸内海流通の特質を論じるに際しては避けることのできない課題である。

いずれにせよ、瀬戸内海をめぐる中世の生産・流通は、特定の拠点到流通網が集約される単純な構造ではなく、複数の拠点が相互に補完、あるいは競合しながら地域社会を支える多面的・複合的なものであったと考えざるをえない。その複雑さに対して、ここで言及できた点はきわめて限定されたものに過ぎないが、本書の成果が今後のさらなる研究の契機となることを期待したい。

二〇二五年三月

鈴木康之